

庵前美智子¹⁾ 中野達也¹⁾ 山内博子¹⁾ 太田志代¹⁾ 森本義晴²⁾ 中岡義晴¹⁾

1) 医療法人三慧会 IVF なんばクリニック

2) 医療法人三慧会 HORAC グランフロント大阪クリニック

【背景】

当院では 2017 年以降、単一遺伝性疾患の着床前診断 (PGT-M) を実施している。また、日本産科婦人科学会は、2020 年から開始している染色体異数性検査 (PGT-A) の多施設共同研究 (研究) の対象を体外受精反復不成功と習慣流産とし、PGT-M 症例の研究参加を認めていない。今回、PGT-A 併用の可否が生児獲得に影響を及ぼした可能性のある PGT-M 症例を経験したので報告する。

【症例】

第一子がデュシェンヌ型筋ジストロフィーと診断されたのを契機に妻が保因者と判明、PGT-M を希望し当院に来院した。来院時の妻の年齢は 40.4 歳であった。承認後、採卵 2 回、9 個の胚盤胞を検査し、移植可能胚 8 個を得た。採卵時の年齢は 41.5 歳であった。移植は 6 回行なわれ、最初の 2 回は妊娠しなかった。次の 2 回の移植は妊娠したがどちらも流産となった。患者は流産が怖くて移植できないと訴え、8 カ月治療を中断し 5 回目の移植となったが妊娠しなかった。6 回目の移植は妊娠したが 3 回目の流産になった。移植可能胚すべてを移植した時点での妻の年齢は 43.8 歳、3 回の流産による身体的精神的苦痛と年齢要因から治療終結となった。全ての流産において実施された絨毛染色体検査には染色体異数性が認められた。

【考察】

本症例は、最初 2 回の移植が体外受精反復不成功となり研究の対象となっている。研究参加が認められていれば、少なくとも 3 回の流産を経験することはなかった。また、2 回目の流産後に研究参加できていれば、患者の流産に対する強い不安に対しても対応できたと考えられる。PGT-A は染色体異数性を知ることができ、流産の回避のみならず、次の治療を選択するまでの期間の短縮ができることから、挙児獲得可能性の向上にも繋がると考えられる。PGT-M は胚生検を実施する為その DNA 産物を用いて、まずは PGT-M 症例においても研究の適応となっていれば研究参加を可能とすること、更には、PGT-M 全症例に対して PGT-A の併用を検討することが望まれる。